

〔書 評〕

渡邊勝之編著『医学・医療原論—いのち学&セルフケア』（錦房 2016）

—日本文化・日本語に基づくいのち学からみる本書の現代的意義—

徳 永 光 俊

私の敬愛する兄が2015年8月に64歳で亡くなった。2002年に腎ガンが発見され、以後肺、内臓、そして脊髄などに転移し、抗ガン剤治療を続けて、2010年には大きな手術を行った。2002年の発病後あと数年と言われながらも、懸命に生き続けた。元気な時には、山歩きや海でのシーカヤック・シュノーケリングなどで自然と交わり、体力的にそれがきつくなると、博物館や遺跡巡りに大好きな車で出かけ、生きがいとなるものを自ら作り出していた。

兄は工業エンジニアであり、現代の西洋医学に絶対の信頼を寄せ、最先端の治療を受ける努力を続けた。治療・服薬などの闘病記録を克明に残し、同病の人に役立つことを願っていた。時折見舞うと、自ずと医学や宗教の話になっていった。私は多分に宗教的であったので、しばしばぶつかったが、そういう話をする兄は、楽しそうで2時間も3時間も話し続けるのであった。

すべての先端治療が終わり、ターミナルケアに入った病院でも、食べておきたいものはこれとあれとか言って食べた。残される家族のために生きようとする強い意志を持ち続け、死と真正面に向き合い続けて13年がたった。死の20日前に見舞った時、それまでと全く違う兄に出会い、驚いた。闘病記録には、その時から死ぬまでの気持ちの変化を書き留めていたので、遺族の方のご了解を得て、ここに記す（一部改変）。

私は「生まれ変わった」、「自然の存在をすべて知るには、人間の五感だけでは足りない」、「物質の諸性質は、人間の五感では捉えきれない」、「物質には人間の感性・悟性にいまだ反映されない諸性質があるかもしれない」、「人間の感覚すべてをなくしてもまだ、ザワザワと人間に響く反映すべき何かがある」、「人間がもともと捉えられないものもあるし、かつては捉えられたが、人間が進化の過程で失ってしまったものもある」。

これこそが、渡邊さんの言う「いのちの体認自証」ではなかろうか。死の直前ではあったが、兄は一生活者として「いのち」の主人公となったのである。

本書のキーワードを私の関心に沿って紹介しておく。「いのち」とは、一なるもの（地）であり、多（図）として分かれてハタラク実在である。一なるものが潜象としての《地のいのち：全一場》、多として分かれたものが現象としての《図のいのち：生命・生活・人生》である。これらの《地と図》を通貫するハタラクが《全一気》である。

《地のいのち》は、言語以前の領域であり、知性（論理）や悟性（数理）で捉えることは困難であるが、生かされて活きている存在者であることは、一人ひとりが人生において、自感し、自覚し、自証することにより、誰もが実感することが可能である。しかし、人類の進化の過程でほとんどの人間には失われていったのである。

一人ひとりが再びいのちの体認自証により、「いのちの主人公、からだの責任者」となっていけるようにすることが、これからの医療の基本となる。

明治国際医療大学の渡邊さんとのお付き合いは古い。京都府日吉町のコスモスファームで、『安藤昌益全集』（農文協）を渡部忠世京大名誉教授らと読み始めたのは、1993年の4月であり、渡邊さんとの初めての出会いであった。この「昌益を読む会」はほぼ毎月1回、2000年4月まで続いた。渡邊さんと読書会などをし始めたのは、1996年12月からで断続的に続いた。

そして鹿児島へ『始原東洋医学』（高城書房）の著者有川貞清先生の病院を一緒に訪ねたのは、1999年11月のことであった。渡邊さんの論文の抜き刷りを、こんなのを書いているから鍼灸学はダメなんだと、有川先生が放り投げられたのを今も鮮明に覚えている。しかしその後、渡邊さんは鹿児島へ通いつめ、有川先生にくらいついていった。2003年に明治鍼灸大学で人体科学会があり、有川グループを招いている。

2010年の1月に東洋医学・看護学・心理学・哲学などの研究者や実践者とともに、「プロジェクトいのち」を立ち上げ、今も続いている。渡邊さんはじめ志ある方々と多彩な分野をともに学べることは、ありがたいことである。渡邊さんはさらに発展的に「いのちの医療哲学研究会」を2014年から始めて、棚次正和京都府立医大名誉教授らと澤瀉久敬などの著作を読まれている。私は参加していない。その研究成果は、2016年12月に棚次先生をリーダーとして、人体科学会で「医学・医療を哲学する—いのちの根源を見据えて—」のテーマで発表される。

お会いして以来20年、それ以前を含めればおそらく30年以上、渡邊さんは一筋に「いのち学」の研鑽を積まれてきた。前著『医療原論』（医歯薬出版）をまとめたのが2011年。さらに5年の体認自証を経て、今回の出版となった。ともに学びあってきた学友として、心からお慶びしたい。本書は、前著と比べて格段に読みやすくなっている。それは、全体の叙述が「全一学」として統合されていること、自分の体験的プロセスを不十分さや失敗も含め正直に書いていること、spiritual を日本語の《いのち》とし、「地のいのち」と「図のいのち」の比喩があること、キーワード解説や図の多用、コラムの工夫などによる。

しかし、それでも難しいことに変わりはない。いのちの体認自証したことを誰にでもわかるように表現することは、不立文字・言葉である故、困難を極める。渡邊さんは、生活用語としての日本語の重要性を指摘しているが、やはり概念的な指向が強いからであろうか、本書でも新しい造語や独特の意味を持たせた用語が頻出する。

私は40年間農業史の研究をやってきて、日本農法の原理として「まわし（循環）」・「ならし（平準）」・「合わせ（和合）」の3つがあることを指摘した。そして、＜天然農法→人工農法→天工農法＞という日本農法の歴史と展望を描いた（『日本農法史からみる農業の未来』『大阪経大論集』第66巻5号 2016）。30年間大学教員をしてきて、農家が作物や家畜の「いのち」を育てると同様に、「いのち」ある若い青年たちの未発の可能性を開発するためには、「そっと手を添え、じっと待つ」教育が重要であることに気付いた。私は日常生活で使う日本語で、研究や教育を作り上げようと努力してきた。まだこれだけかと内心忸怩たるものがあるが、今後とも私なりに「（日本）農学原論」，「21世紀日本の青年教育」への道を歩んでいきたい。今回の渡邊さんのお仕事には、大いに励まされたし、焦りも感じている。

私がいつも肝に銘じ、朝晩のお祈りの際に唱える言葉に、「おかげさま」・「おたがいさま」の2語がある。故郷の松山で2013年に89歳で亡くなった老母に、幼い時から言い聞かされた言葉である。「おかげさま」は、感謝して祈る気持ちであり、渡邊さんのいう「地のいのち」の受容ではないのか。「おたがいさま」とは、生活世界でつながっていく気持ちであり、「図のいのち」のつながりではないのか。日本文化、日本語で生活する私たちは、「いのちの体認自証」を日常生活の中で気がつかないうちに繰り返していたのではないだろうか。

昭和戦前から戦後の農山漁村を歩いた民俗学者の宮本常一は、『忘れられた日本人』の中で、「そこにある生活の一つ一つは西洋からきた学問や思想の影響をうけず、また武家的な儒教道徳のにおいのすくない、さらにそれ以前の考え方によってたてられたもののようであった。この人たちの生活に秩序をあたえているものは、村の中の、また家の中の人と人の結びつきを大切にすることであり、目に見えぬ神を裏切らぬことであった」と述べている（岩波文庫289頁）。日本列島には欧米の文化、儒教文化、それ以前の文化と、3層の文化があったのである。

「目に見えぬ神を裏切らない」とは、「おかげさま」の祈りである。「村の中の、また家の中の人と人との結びつきを大切にすること」とは、「おたがいさま」と労り合う世界である。こうした生活世界が日本列島には、ごく最近まで確かに存続、伏流していたのである。最初に紹介した兄がいのちの体認自証できたのも、こうした世界が基層にあったからであり、老母の教えがあったからであり、死と真正面から向き合い続けたからであり、それが突然表出しただけのことであろう。決して特異なことではなく、日本列島で生活するすべての人々に可能性として開かれているのである。

ここで一つ考えてみたいのは、渡邊さんの言う「いのち」を日本人はどのように感じ、表現してきたのかという点である。たとえば私の研究してきた江戸時代の農書において、「いのち」という表現はほとんど見られない。「稲（いね）は命のね」（『会津歌農書』1704、『日本農書全集』第20巻12頁）「稲はいのちの根、米（よね）は世の根といふの略語なり」（『農業余話』1828、同前第7巻372頁）などとたまにあるが、「生命」の意味であり、渡邊

さんの言う「いのち」とは異なる。おそらく「いのち」を体認自証していたとしても言わずもがなで、それを「いのち」という日本語でわざわざ表現する必要がなかったか、江戸時代にはそれが日常的には出来なくなっていたのか。

渡邊さんは、先ほどから私が紹介している『『おかげさま』や『ありがとう』の日常よく使用される言葉は、特定の对象的な誰かに向けて使われるだけではない』（本書38頁）と述べている。「特定」ではなく「不特定」，「向かう」ではなく「受ける」を考えてみよう。私たちは、特定の神や仏ではなく、不特定の何ものかに向けて、祈ったり感謝したりする場合も多いのではなかろうか。しかし、その不特定の何ものかが何かは、とくに名付けて自覚していない。

そして不特定の何ものかによって生かされて活着していると、何ものかのハタラキを受容・感受した時、私たちは「おかげさま」，「ありがたや」の言葉がついて出る。このように、不特定の何ものかと「私」は結ばれているのである。渡邊さんの表現で言えば、《いのち》が<私>を表現しているのである。「お・かげ」，「み・かげ」の「かげ」。この「かげ」は、渡邊氏の言う「いのち」と、どういう関係にあるのか。全一気のハタラキにより創発された「光」と、「かげ」はどのような関係にあるのだろうか、今後私なりに考えてみたい。

本書の現代的・画期的意義は、不特定の何ものかを、日本語の「いのち」と名付けて、再び「いのち」の体認自証へと導き、「全一学」により「医学・医療原論」を展開した点にある。

私が勤めている大阪経済大学の初代学長黒正巖博士は、百姓一揆研究の開拓者であったが（私は黒正博士の学問の孫弟子にあたる），「道理は天地を貫く」と述べた（『黒正巖著作集』全7巻 思文閣出版 2002）。「道理」を「いのち」と、「天地」を「図・地」と読み替えれば、まさに本書の主張と重なる。元学長である鈴木亨先生は、西田哲学の後継者であるが、「存在者逆接空・空包摂存在者」（＝地のいのち，おかげさま）と述べ、「響存的世界」（＝図のいのち，おたがいさま）を主張した（『鈴木亨著作集』全5巻 三一書房 1996～97）。

私もまた「おかげさま」・「おたがいさま」を唱えることで、黒正博士、鈴木先生の学統を受け継いでいきたいと願う。ただし、私自身はいのちの体認自証が出来ているなどとは思っておらず、ただひたすら、「おかげさま」・「おたがいさま」を唱えて祈っているだけである。

こうして渡邊さんのご労作に対し、書評を寄せることが出来るのは、私にとって望外の喜びである。本書をお読みいただき、生活者として「いのちの体認自証」への近づき、羅針盤としていただくことを願ってやまない。

（本稿は、同意への推薦文に加筆修正したものである。）